

## ひとりひとりの子どもを見つめて⑨

### 赤羽美代子

いつものように、朝の登園時、子どもたちを迎えるために玄関に立っていた。そろそろ園児の姿もとどえた頃、M子（年長組・女兒）がすーっと寄ってきて、私の脇にベタっとくっついてくる。M子はまた来ぬ、仲良しのY子の登園をここで待つ事にしたらしい。私にもたれかかり、M子は「Yちゃん遅いね」とか「Yちゃんのお家は遠いからね」とか、いろいろと言っている、Y子を待つ間、あせる気持ちをまぎらわせているようだ。ふと、気がつくとM子は、ぐにやぐにやとした身の動きを止めて静かにしている。まさか眠ってしまったのでは、と思う程身動きもせず、庭の一隅を、ぼーっと、じーっと見つめている。私も園庭に目を向けた。周囲が妙に静まり返り、盛夏の陽光を思わせるようなオレンジ色に染まった園庭に、子どもたちの遊ぶ姿が大きく浮かび上がる。どこかで見た名画を思わせる一瞬

であった。

最近にない、天高く、青い空を背景にして、U子（年中組・女兒）が、庭の一隅にある鉄棒の前にひそっと立っていた。園庭の広い空間を避けて、片隅に身を寄せて、そそと立つ子は、いかにも今のU子の心の状態を表わしている風情である。

M子は何を感じたのか、私の目をちらっと見てはU子を見つめる。また私の目をちらっと見て、U子を見つめる。どうやらM子の心の中で、理解しがたい事がふくらんでいくらしい。私も、そーっとM子の横顔を見つめる。M子は、心理学者の目と心を持って、U子を観察している様子。ややしばらくしてから、M子は私の肩をポンポンと叩き、「先生、U子ちゃんって、顔も、手も、足も、同じなのね」と何か感心してしまったり、な話しぶりである。「顔も、手も、足も、同じなの？」「ほら、U子ちゃんを見てごらんなさい！「ゼーんぶ同じ」と、またもや感心する。

U子は色白で、巻き毛の女の児。U子の癖なのか、幾分下から見上げるような、上眼づかいに立ち、足元が張りのないポーズである。U子は、顔、手、足が同じに無表情なのである。他の友だちは、U子の存在を無視して遊んでいる。

U子が佇む斜め前方の木影で、HとL太（年中組・男児）が、スクーターを握り、いかにもひとやすみというムードで大きな庭石に腰掛けていた。ふたりの雰囲気は、黙っていても、身体中で会話をしている様子が伝わってくる。通りすがりに、二人の男児が、HとL太に声を掛けていく。HとL太の手の動き、首の曲げ方、目の大きさ、口のあけ方は、離れている私にさえも「ふーん、そうなの」と、返事をしたくなるような陽気さが伝わってくる。

Hは未熟児で生まれ、身体も小さく、殊に言語の発達が遅れている。言語による理解はあまり望めないHに対して、Hと仲良しのL太は、Hの何を捕え、何と通じ合って遊んでいるのだろうか。他の子どもたちも、意味もなく、Hの名を呼んでいる光景によく出合う。Hも、微妙な身の動きで返事のかわりをする。相手もそれで満足するようである。

子ども同志の接触は、初めは互いに、相手の全身から滲み出る、声なきことばが語られ、互いに納得し、時には喧嘩も生じながら、遊びの根底を据えていくのだろうか。次に、遊びの発展を促すために、ことばで語られ、その指、手、足、声、身の動き、後ろ姿、髪の一毛一本、一本が、意志として働き、感じ合

いつつ、互いに遊びをくふうし、考え出し、持続させる努力をし、一日の生命を燃焼させるのだから。遊びの対象は、泥であったり、水であったり、木の葉であったり、紙屑であったり……。子どもと関わった物体は、子どもから生命を与えられて、生命のある物に変えられ、生き物として扱われる。

ここで、これらをそっくり我が身に反して考えてみる。教師である私の顔は、手は、足は、子どもの、この子どもたちの何を、どう捕え、どう関わっただろうか。子どもたちが自由にイメージを広げる空間を潰して、平気でいる無表情な全身ではなかったか。或る時には、子どもたちに、「先生の顔なんかいい方がよい」「先生の手、足はうるさい」と、閉口させていたかも知れない。

きょうも、子どもが出発した出口から、私も出発して、迷子にならぬよう歩かなければ……。そして、良い意味で子どもたちから「先生って、顔も、手も、足も、ゼーンぶ同じなのね」と、言われるように、目醒めたいと願いつつ、子の佇む鉄棒の方へ足をすすめた。

（靈南坂幼稚園）